

## 統一テーマ「ロマンス語における疑問文」

長神 悟 (とりまとめ)

### §1 はじめに

日本ロマンス語学会第47回大会の統一テーマは「ロマンス語における疑問文」であった。この枠内で倍賞、鈴木、山本、今田、黒澤の5氏が発表(持ち時間、各20分)を行なった。休憩を挟んで、総合討議が筆者(長神)の司会のもとで行なわれた。鈴木、山本、今田の各氏は発表を論文としてまとめて本号に掲載している。倍賞氏、黒澤氏からは発表をまとめたものが提出されたので、本号では「報告」として掲載した。

### §2 総合討議と質疑応答

**長神悟(司会)**：今日5人の先生に疑問文についての興味深いお話を伺いました。司会のほうで整理させて頂くと、疑問文の形式ということでは、全体疑問文、疑問詞を伴う部分疑問文、さらに直接疑問文や間接疑問文、付加疑問文というものがありました。それから、種類あるいは形式と密接に関連しますが、イントネーションも問題になりました。そして、大きな問題として語順、またある種の語彙的な要素が疑問文の形成に関わることを考えることができると思います。以上のことを踏まえ、大雑把に論点を整理させて頂き、その順番に沿って発表頂いた方に質問などを出して頂けたらと考えます。まず、ロマンス語の疑問文のイントネーションということで、質問あるいはご意見をお述べになりたい方、どうぞお願いします。

**牧野真也(以下敬称略)**：札幌出身ですと東京方言のイントネーションと違う部分があって、全体疑問文、一般疑問文で完全に下がりきらないことがあります。北海道方言は「わかる」(ピッチが文末で上昇)と言わず、「わかる」(ピッチが文末で上昇も下降もしない)で疑問文です、下がってしまうと「僕はわかる」という意味になります。疑問文のときに完全に下がりきらないことが下がりきることと対立して、真偽疑問文になっている可能性があるのかと思い、自分の方言と絡めてお話しました。疑問かどうかわからない場合がある、下がりきらない場合があるということと完全に下がるというのが対立している可能性がポルトガル語でもあるのではと考えました。

**長神**：今日は日本語の疑問文は直接の対象に入っていないのですが、ロマンス語でもイントネーションの問題は、文末が上がるというだけのことで済まないこともあろうかと思えます。今日ご発表になった先生方で何かこの点に関して追加でお話しになりたいことありましたらお願いしたいと思います。

**黒澤直俊**：紹介したのは京都外国語大学の彌永先生という方が行った研究で、文末の最後の単語のアクセント位置の次に必ず何か音節が残っているタイプの例文を作り、つまり後ろから2番目か3番目が文末の最後の強勢音節である例文を作ってデータをとっています。ブラジルのポルトガル語は最後の強勢音節のあとで下がります。上がるのは文末の強勢音節のちょっと前から上がって、それから下がります。ところが、ポルトガルのポルトガル語は上がったままです。おそらくポルトガルの場合、アクセントの無い音節は弱体化しますから、このようなタイプの文例では、上がってその後はもう発音されない、あるいは非常に弱いのでもう下がる余地がないという可能性があります。

**富盛伸夫**：今の問題に関して、前提となる、疑問文について、これが疑問文だという了解事項があると思うのですが、特にイントネーションについて強く思いましたので発言します。例えば、一応これは聞いているなとわかって、その真偽を聞く情報の一部分の取得に、つまり情報をもらうための疑問と、既に自分が持っている、予測している情報の確認のための疑問文、さらに反復疑問文、いわゆる確認というか、反語的

な反復も、また驚きを示すために使う疑問形式もあります。さらに感嘆文に近いものもあると思います。つまり疑問という形式にのせる談話機能、語用論的としてしまうとひとつのくりができてしまいますが、形式にのせる、あるいはのせられている広い意味での発話意味のようなものへの言及を確認した上で議論するのが、イントネーションの場合は必要ではないかと思いました。歴史研究でも Posner の 1995 年の論文では、そのあたりにも取り組まないのだめだという主張をしていて、それぞれの言語史で何が起こったかを考える上で pragmatics の観点も加えるべきという主張です。

**長神**：疑問文といっても深く見るといろいろなものがあるという、当然考えなければいけないご指摘を頂きました。今日の全体的な発表では、相手に答えをもらうというのが一番中心的なお話だったとは思いますが、確認を求めるとか、驚きを表わすとか、そのようなものも含まれていたと思います。さらにイントネーションに関して発言がありましたら、どうぞ。

**後藤齊**：文の末尾というだけではなくて、フォーカスでイントネーションの変化が起きるという予測も大きく思いますが、その点についてはどうなのか。例えば黒澤先生の資料の 8a の例文 A Inês vai a Lisboa AMANHÃ? (7) 「イネスがリスボンへ行くのは明日？」ですが、これは「明日」というところが疑問の焦点だと思いますが、その意味の場合と、ディスコに行くのか行かないのかという焦点の無い場合で違うかどうか。それがイントネーションにどう表れるかという点はいかががでしょうか。

**黒澤**：大文字になっているところでイントネーションが上がります。文中にフォーカスがあると、そのイントネーションは上がります。平叙文でもフォーカスのあるところは少し上がります。ですから、これは、行くのか行かないのかという時に通常に上がるのと、フォーカスのためにちょっと全体に上がって、下がるという構造をとります。

**長神**：今日の発表でフォーカスの問題を扱われた鈴木先生、古イタリア語が中心でしたが、現代語を含めてフォーカスとイントネーションとの関連でお話し頂けますか。

**鈴木信五**：古イタリア語のイントネーションは検証できませんが、私のレジュメの 20 番、陰悪な雰囲気の中での対話で、最初に Dunque volevi tue uccider mee overo Tristano? 「私なのか、それともトリスターノを殺したいのか」と聞かれて、答えるほうが聞き手を殺したいわけではないことを言うわけですね。その聞き手が今度は話し手になって言う Dunqua volei tu uccidere pur Tristano? 「じゃあトリスターノだけを殺したいんだな」というところ、当時の人がいければ聞いてみたいですが、おそらくユニバーサルにコントラスト・フォーカスのある部分には相当の強めがくると考えられますし、現代イタリア語でもこの部分は単に文末だからというだけではなく、やはり強く言うところだと思います。

**長神**：関連して他にありますか。

**福嶋教隆**：もうちょっとイントネーションについて聞かせて下さい。フォーカスが当たるところは強く読むというのが約束なので疑問詞は強く読むのが普通でしょうが、スペイン語の場合 ¿Cómo está usted? と言って「あなたは元気ですか」というときは cómo が普通は強くなりますが、最近の若い人は ¿Cómo está usted? や ¿Dónde estás? のように疑問詞を抑える傾向が明らかにあると思います。他の言語にも同じような現象があるようでしたら教えてください。

**今田良信**：直接関係するかどうかわからないですが、ハンドアウト 2 ページ目一番下の④の間接疑問タイプです。NHK のラジオ講座から引用したのですが、Comment il s'appelle? について、発音練習で Comment のところが上がるような発音がされていたと思いますが、この表現が出てくる全体のスケッチで実際の抑揚を聞くと、必ずしも Comment (↑) il s'appelle? (→) ではなく Comment (→) il s'appelle? (→) というふうに Comment のところで上がらずにそのまま平板に言っているのではないかという箇所がありました。この例は、疑問詞のところで抑揚が上昇するか平板のままかという違いで、類似した事例かもしれません。

鈴木：古イタリア語ですがイントネーションとの関わりで指摘したい。3 ページの (iv) です。Perché battete voi costoro? 「どうしてお前たちは彼らを叩くのか」と、先生に弟子（王の息子なので大切に扱われている王子である弟子）が聞くので、先生達が答えます、Per li falli tuoi. 「殿下の間違えのために」彼らを叩くのだと。するとそれに弟子（つまり王子）が Perché non battete voi me? 「どうして私を殴らないのか」... ch'è mia la colpa. 「私に罪があるのに」というところですが、これは perché 「なぜ」という疑問詞があつて、本来ならここにフォーカスがあるはずですが、その次の (v) の例と比べるとよくわかるのではないのでしょうか。(v) は別の小話からとったものですが、Non uccidere l'innocenti,... 「罪の無い人達を殺すな」... ma uccidi me cui è la colpa. 「罪のある私を殺しなさい」という文があるんですが、これは疑問文ではなく、命令です。そこで (iv) に戻ると、これは修辞疑問で、「なぜ」というのを聞いていない。答えがどうあろうと「なぜ」を聞いているのではなく、「彼らではなく私をぶって下さい」ということが言いたいのです。現代のイタリア人であれば、Perché non battete me? のように、コントラスト・フォーカスのある me を強く言って、perché はそれほど強くならない。修辞疑問ということが関係してくるのではと思います。

鳥居正文：今田先生のハンドアウトの Comment il s'appelle? ですが、これは Comment の前が問題で、文脈によって Comment il s'appelle? のイントネーションも違ってくるのではないのでしょうか。

今田：おっしゃる通りで全体のスケッチでは、前の文脈があつてこの表現が出てきますが、練習のときはその表現だけを取り上げてやったりしますから、その点で状況が違うと思います。

長神：時間が限られておりますので、少し別の話題のほうに移りたいと思います。何々語といっても方言的な違い、ポルトガル語でもポルトガルとブラジルでの違いがあるようなことや、福罵先生からご指摘のあつた、若い世代におけるイントネーションの違いというような話題、そういうレジスター、つまり地域的なレジスター、あるいは年代的な違いによるレジスター、あるいはフォーマルな口調での言い方や使い方、くだけた口調の中での疑問文の使い方などいろいろ違いが出てくると思いますが、次に語順ということで話をさせて頂きたいと思います。語順は疑問文を平叙文と区別する上で非常に大事な要素になってくると思いますが、語順について何かご質問あるいはご意見のある方は、挙手をお願いします。

古浦敏生：鈴木先生のご発表についてもそうだと思いますが、動詞の前に出る要素だとか、そのすぐ後ろの要素が主語に立つのですね。使用されたテキストの中にダンテの神曲が入っていますが、韻文なので、脚韻などの特別な関係がありますから、外して考えられたほうが安全だと思います。

鈴木：ダンテは (24) の b と (25) の a で 2 箇所出しています。(24) は Quei sono spirti... ch'i' odo? 「私が声を聞いているあの人達は亡霊なんだろうか」と odo が脚韻の部分に来てます。大変技巧的で、ch'i' odo と quei が離れているのでご指摘を受けたのだと思います。しかし、(25) の a に関しては外すつもりは無いんです。何故かと言うと、ここは脚韻というより voi che siete qui felici とはっきりした左方転移というか、破格構文と言ってもいいくらいで、左に出てきた要素を受け desiderate voi と、もう一回 voi が出てきて、韻文だからこうなったということだけでなく、当時のイタリア語にこういう側面があるのではないかと思います。

富盛：疑問のマーカースとして、ある意味で長い間安定して語順が使われる。倒置ですね、それが様々な疑問形式の中に安定した表現形式としてあつたことは重要だと思います。ガロ・ロマン地域ではその傾向が強いので、フランス語とフリウリ語あるいは北イタリアあたりについてご意見を伺いたい。レトロマンもそうなのですが、非常に高い確率で、規範的には 100% そのマーカースが使われます。主語接辞の問題もあり口語では見極めにくい部分もあります。それは別にしても、その動詞第 2 位置が定動詞第 2 位置の原則からなのか、そして倒置が疑問のマーカースとして安定した段階に入って、フランス語ではそれがだんだんと希薄になったという指摘もありましたので、もう少し補って頂けると勉強になります。

今田：富盛先生のご指摘はその通りですが、何をお答えしたらよいでしょう。

富盛：例えば先生のデータの中で倒置が一貫して非常に古い中世から既に疑問のマーカ―として安定していたかという確認ではいかがでしょうか。

今田：はい、それは先ほど申し上げた通りです。文法書などでは、これが基本、de règle「原則である」と書いてあります。古い言語の音声は残ってませんので疑問のマーカ―として抑揚については何も言えませんが、書いたもので疑問文を示すには、やはり語順をかえる、倒置するのが一番はっきりわかるわけで、その点を考えても、疑問のマーカ―としての倒置についてはおっしゃる通りだと思います。

町田健：ラテン語の時代には yes-no 疑問文は ne や nonne の接辞を使っていたので、ロマンス語は倒置を使わないで疑問文を作るというのが当たり前であるというような歴史を考えると、フランス語だけは違うというのが前から考えていることですが、先ほど富盛先生がおっしゃったのですが、フランス語は倒置をちゃんと使ってやはりおかしいですね。ゲルマン語からの影響によるのかわかりませんが、定動詞が 2 番目に来るという語順が古フランス語ではよく見られるわけですが、それと倒置をよく使うようになったことが関係があるのかなのか、それはどうでしょうか。

今田：定動詞第 2 位はゲルマン語の影響と言われたりしますが、ちがうという意見もあり、私はよくわかりません。従って、定動詞第 2 位がゲルマン語からの影響かわからないとなれば、必然的に疑問の作り方がゲルマン語からの影響かどうかというのも直接的な関係を言えるかどうかかわからないことになります。

町田：ゲルマン語の上層の影響はあってもなくても、V2 語順と疑問の倒置がフランス語で一般的になったこととの関係はあるのか、それとも全然ないのかということはいかがでしょう。

今田：古仏語も現代語も、基本語順は一応 SVC、いわゆる SVO 語順です。古仏語は動詞第 2 位ですから、平叙文では C が前に出れば VS となるのが普通です。平叙文でも SVC と CVS 両方成り立っていて、語順として頻度も半々くらいであったことも考えれば、どうでしょうか。SVC が平叙文として固まって、それとの違いを際立たせる方法として倒置と言われれば、それは理解できますが、動詞第 2 位と倒置による疑問の成立の時期的な問題で、関係の有無が言えるかどうか私はちょっと疑問を持っています。

鳥居：今の問題と関連すると思いますが、フランス語ではある時期から疑問文を導く est-ce que が発達してきました。今田先生のハンドアウトの 3 ページに qui est-ce qui, qu'est-ce que は古フランス語では稀とありますが、稀でもあったと思いました。詳しく調べたわけではありませんが、que や qui の付かない est-ce que は 16、17 世紀頃生まれてくると思ってましたから、意外な気がしました。est-ce que は倒置を避ける疑問のマーカ―として凝結という一つの単位になってきたわけで、辞書の扱いはバラバラで、見出し語にしているものや、être のところや、ce のところを出しているものがあつたりします。刊行中のアカデミー辞典第 9 版では est-ce que は独立の見出しでなく、ce のところで locution として取り上げ、être のところでも触れています。est-ce que を使うことで倒置を避ける、倒置しない方向に向かっているとすれば、フランス語も本来は倒置を使わない疑問文を用いる傾向の言語ということができるかもしれません。

今田：1 つだけ情報としてお答えしておくと、参考文献の Christiane Marchello-Nizia の 1999 年の *Le français en diachronie* ですが、この人は語順のエキスパートですが、疑問文の語順に関連して est-ce que は全体疑問と部分疑問で現れる時期がずれていると指摘しています。全体疑問では est-ce que SVO という新しい疑問の言い方は 15 世紀に現れ、一方、部分疑問の場合は、古仏語以来の疑問詞+VS(O)という語順に対し、疑問詞+est-ce que SV(O)という言い方は 12 世紀末に現れたとされています。全体疑問の est-ce que SVO というのは、部分疑問の疑問詞+est-ce que SV(O) より 2 世紀くらい遅れて現れてきたということです。

後藤：フランス語はロマンス語の中でちょっと異質というところが色々あると思いますが、疑問とは関係ないですが、否定が pas だけになって動詞の後ろに否定辞がくるということにも言えるわけですね。

山本真司：それは北イタリアにもあります。

後藤：で、疑問文でフランス語に前から私が不思議に思っているのは、「何が」と「何を」を区別する。印欧語では中性名詞、中性代名詞は主格対格が同形で、「何が」と「何を」を区別するのは印欧語的には無いです。それに格も衰退する傾向にありますから、新しく「何が」と「何を」を区別するのは典型的な変化としてかなり変なふるまいだと思っていたのですが、いかがでしょうか。

今田：フランス語は「誰が」と「誰を」、それから「何が」と「何を」を、*qui* と *que* の区別と *est-ce* の前後の位置の組み合わせによって表します。*est-ce* の前に出てくるのが「誰」、「何」の区別に当たる部分、*est-ce* の後に来るのが「が」と「を」の区別と考えたらわかりやすいですが、4タイプに分けて区別します。おっしゃる通りで、そこまでこだわるのは、他のロマンス語に比べれば特徴的かと思います。

長神：最後に付け加えておきますと、フランス語に複合倒置というのがありますね。名詞の主語を出しておいて、あとでひっくり返すというもので、基本的には *est-ce que* と同じように主語が先にくて動詞が後に来る、語順を保つ一種の方策だと考えてもよろしいのでしょうか。

今田：朝倉・木下(2002)の『新フランス文法辞典』では、複合倒置のルーツは *Paul, est-il venu?* というような例を挙げて一同様の指摘は *Foulet* も *Syntaxe de l'ancien français* の中に書いていて、このあたりの判断は非常に難しい、つまり区別するのは難しいことを断った上で書いていますが、*Paul* を転位して強調するこのような語順から複合倒置が生まれたという言い方をしています。つまり *Paul*、一ももとはコンマ *est-il venu?* という言い方ですね。そこからコンマが取れて *Paul est-il venu?* と変わって来たのではないかという、強調形に由来しているのではないかという指摘がありました。これは1つの説です。

長神：フランス語で話が続きましたが、北イタリアということで、山本先生、何かございますか。

山本：1980年か81年に *Benincà* と *Vanelli* のヴェネト方言に関する代名詞の論文が出ました。以降、動詞の *enclisi* あるいは *inversion fornen*、いずれかあるいは両方に関わる現象は代名詞の進化に関わる研究ということで、おびただしい数の方言の調査がなされ、それをまとめて、一定の方向へ進化がいくのではないのかという傾向が見えてきているというのがパドヴァ学派の固まりつつある見解だと思います。それが進めば進む程、これは他のロマンス語には無い独特の特徴であるということが北イタリアにはある、ということになりますので、フランス語は独特であるといえるか、私は自信がありません。否定が後ろに来るのは北イタリアではごく普通です。フリウリ語でも *enclisi* なのか *inversion fornen* なのかは微妙で、パドヴァ大学でもウディネ大学でも議論がされると聞いていますが、フリウリ語の場合は、分けがたいところもありますが、やはり分けないとまずいことが多い気がします。それで疑問形が倒置形に一致するのはごく一部です。倒置形が疑問形でない、それから非倒置形、これは語用論になりますが、疑問形でないけれど、言いたいことは疑問であるということもあります。

富盛：フランス語では複合倒置が発達したが、その複合倒置も避けられつつある。主語の代名詞が倒置した形で後ろに接辞的につくわけですが、そのプロセスがどのくらいの言語に広がっているかということに関心がある。レトロマンでは複合倒置で接辞化したものは無い。ドイツ語のように名詞主語の場合でも、目一杯倒置します。一方で、倒置というプロセスから早く離れたか、あるいはもともと持っていなかったと思われる言語群があって、フランス語はどちらかというフランク族の第2波であるラインランドからの7,8世紀のカロリング朝のあたりが倒置を持ってきたという説があって、そのあたりから倒置が広まったのですが、今度はそこから撤退している。複合倒置はその途中の段階で、そのあたりが大変面白い現象ではないかと思っています。

長神：私のほうでちょっと気になっていることがあるのですが、フランス語の場合 *pourquoi* 「なぜ」という疑問詞を使った疑問文の場合、名詞主語では複合倒置が義務的になる。これが他の *quand* とか *où* とかの疑問詞では違ってきますが、「なぜ」の場合は *Pourquoi Paul vient-il?* のようになる。それをいろいろ考えてみる

と疑問詞疑問文でも疑問詞の種類によって、ある種の部分的な要素を聞くような疑問文と、事態全体を捉えて「なぜそうなのか」ということを聞くような疑問文の場合とで、複合倒置が関わる問題が出てくるのではないかなと感じていたのですけれども。

石岡精三：ルーマニア語でハンドアウトの最後の下から4行目ですが、主語の位置は自由であるが、疑問文だから動詞が前に出るとありますが、そうではなく、主語が動詞の前に行けないのではないですか。

倍賞和子：私が言っているのは、「主語の位置については自由なので、疑問文だから動詞が前に出ているのか、ルーマニア語の特徴としてそう（前に出る）のか簡単に言い切れない」ということです。n) の *Ce anunță ziarele?* は *Ce ziarele anunță?* でも間違いではないが問題があります。ルーマニア語では *Ce anunță ziarele?* が自然と思います。平叙文では主語が動詞の前、疑問文では動詞が主語の前ということはないです。

石岡：私が読んだ論文などでは *Ce ziarele anunță?* のような例はアウトになっています。

倍賞：語順としてはどっちでもよいと発言した *Ce ziarele anunță?* ですが、確かにこの文はあり得ません。語順が問題なのではありません。ルーマニア語では、目的語が主語より前に置かれたとき、その目的語に代わり得る代名詞の弱形を動詞の直前に置くという法則があります。この文では *ce* が文頭にあるので、*anunță* の前に代名詞の弱形がある筈で、*ziarele* と *anunță* が並ぶことはあり得ないのです。ただし、*ce* には弱形がありません。結局 *Ce anunță ziarele?* が唯一の正しい文になります。

菅田茂昭：語順がテーマなので発言させていただきます。ソシユールが価値を扱っているところでフランス語の例で *est-ce que* を使った疑問文とそうでないものはイコールと簡単に考えてはいけなと述べています。サルディニア語で面白い現象があるのですが、疑問詞の無い疑問文の場合、例えば「あなたは～を買うの」のような疑問文になると一般的な傾向として動詞が最後に来て、コンプレマンは副詞であれ、直接目的語であれ、動詞の前のほうに動かしてしまうという現象があります。

長神：やはり疑問文と語順とが非常に密接な関係があるかもしれないということで、ご指摘頂いたと思います。色々議論したいこともまだあるでしょうが、時間が押してきておりますのでまとめたと思います。イントネーションの問題、それから語順の問題という順番で参りましたが、それ以外で例えば今日は日本語の疑問文は対象になっていませんが、日本語の *ka* のような疑問文を明示するような表現がありますね、今日はラテン語についての発表は無かったですが、町田先生が言及されたように、ラテン語で疑問詞を使った疑問文の他に *yes-no* で答える *ne* とか *nonne* という要素を使って疑問文を作る方法があったと思います。ラテン語の場合 *yes-no* といっても *yes*, *no* にあたる表現も確立していなかったもので、違うところもあると思いますが、そういうことも含めましてイントネーション、それから語順以外のことについてご発言されたい方がありましたら最後に承りたいと思います。

古浦：付加疑問文というのは「～ですね」という念押し・確認を表わす疑問文ですが、英語の場合、主文が肯定文のときは否定の付加疑問文で、主文が否定文のときは肯定の付加疑問文での対応が鉄則ですね。ポルトガル語で否定辞が含まれている否定の付加疑問文は、主文が肯定であれ否定であれどちらでも用いることができるのがわかりました。フランス語も *n'est-ce pas* という否定の付加疑問文は、主文が肯定文でも否定文でもどちらでも使えると聞いています。イタリア語もどちらでも使えるようです。否定の付加疑問文は *non è vero?* で、肯定の付加疑問文は *è vero?* です。単に *vero?* というものもあります。ポルトガル語・フランス語・イタリア語以外のロマンス語について、教えて下さればありがたいと思います。

福島：スペイン語についてお話ししますと、*no* というのと *verdad* とあるけれども、*no* という付加疑問は肯定文のときにしか使わないとある先生から教わりました。そうかなあと見て見ましたら、実際には否定文でも平気で *no* ということができますので、スペイン語は特に肯定、否定は無しに *no* であっても *verdad* であっても使えるとっていいようです。

秦隆昌：n'est-ce pas の ce は文全体を受ける、スペイン語で *hace buen tiempo, ¿no?* 「いい天気ですね」というときは、*hace buen tiempo* を否定して *no hace buen tiempo* を略していると。それで疑問に思っていたんです。フランス語の *n'est-ce pas* とその他の前半が肯定で後ろが否定か、前半が否定で後ろが否定にならないかという問題とちょっと関係して、フランス語は別でないかと言われると思うんですね。それと確かに私も授業では前半が否定でも肯定でないといけなと習ったのですが、実例はあることをスペイン人から聞きました。

長神：もっと討議したいことはございますが、時間ですので、本日の討論会は終わらせて頂きます。

### §3 まとめ

本総合討議においては「ロマンス語の疑問文」を扱ったが、もとより、疑問文はロマンス語に特有の表現形態ではなく、人間言語に普遍的にみられる表現形態であろう。疑問は、伝達のもっとも基本的な形である対話に関わり、「情報伝達の出発点に位置づけられる、すぐれて言語的な行為」（亀井ほか編著『言語学大辞典第6巻【述語編】』三省堂、1996、「疑問」の項）であり、「話し手が自分にとって不明な事柄を相手に伝えて、その不明を明らかにしようとする事」（同書）である。その疑問を表現する「疑問文」が、ある事態や命題全体の不明を問う、全体疑問文ないし一般疑問文（あるいは諾否疑問文、いわゆる *yes-no question*）と、事態や命題の一部の不明を問う部分疑問文とに大別されることはよく知られている。そして、両タイプの疑問文を通常の平叙文と区別する手段として、平叙文とは異なる音調（上昇イントネーション）や語順（倒置など）が用いられるほか、疑問文に特有の文法形態や語彙要素（フランス語の *est-ce que* や日本語の疑問助詞「か」、さらに各種の疑問詞）が使用されることも同様に知られているとおりで。本総合討議およびそれに先立つ各言語に関する報告において、ロマンス諸語に関しても、こうした手段がいずれも活用されていることが再確認されたが、個々の手段について細かくみていくと、言語による違いが浮かび上がってきたほか、個々のロマンス語内部において疑問形式の歴史的変遷が相当に重要であることも当然のことながら再認識できた。本討議では、文の焦点（フォーカス）や語用論的な側面との関わりからも疑問文について討議されたが、このほか、感嘆文や関係詞節との関連なども考慮すべき問題点であろう。いずれにせよ、今回の「統一テーマ」がきっかけとなって、ロマンス語の疑問文について解明の進むことが期待される。